27th RECITAL 【1959 年（昭和 34 年） 1 月 31/2 月 1 日】

神戸国際会館/フェスティバル

9. 関西学院グリークラブ	指揮	根津　弘
組曲 〃中勘助の詩から〃		多田武彦曲
		中勘助詩
絵日傘	Solo	豊田健治
椿		
四十雀		
ほゝじろの声		
かもめ	Solo	井内義博
ふり売り		
追羽根	Solo	豊田健治

組曲「中勘助の詩から」を作曲して

多田武彦

たしか昭和24年の５月でしたか大阪の北野劇場で関学グリー創立50周年の記念演奏会が催された時に、プログラムがシューベルトの『夜』の演奏に掛つた頃、はじめて男声合唱のハーモニイの美しさを知りました。爾来私は今日に至るまで関学グリーファンであり、それも口では色々と批判しながらも心の中ではあの『トンネルの中の響の様なハーモニイ』に郷愁を持ち続けて居ます。

こうした郷愁と併行して私は、私が京大男声合唱団の指揮者であつた頃から、関学グリーの演奏上の長所について探求し続けて来ました。そして一昨年になつてその伝統的技術的強味のよつて来たる所以を私なりに突き止めてこの探求は一段落しています。その一部を、日本の合唱音楽発展の一助とすべく、この関学ファンが二三の雑誌に敢て書いて居ますが、今度の私の第５番の組曲である『中勘助の詩から』は、関学グリーの今後の一段の発展を願うべく、今まで私が探求して来た『関学グリーの演奏上の短所』を補う為の『エチユード』として書いてみました。勿論、これが動機のすべてではありませんが、潜在意識として働いていたことは確かでしよう。

作曲上新しい試みは無く、『十二音技法にあらざれば音楽にあらず』の風潮から見れば全くもつて古くさい作曲技法に終始していますが、宜敷く御見逃し願います。